

# 大和郡山・百寿橋の系譜と現況に関する研究

株式会社 産経住設  
近畿大学理工学部 社会環境工学科  
大和郡山市教育委員会 社会教育課

川原 賢史  
岡田 昌彰  
服部伊久男

## 1. 研究の背景と目的

奈良県北部に位置する大和郡山市は、柳沢氏 15 万石の城下町として発展を遂げた。現在の大和郡山市役所は旧生駒郡役所以来、郡山城の中堀沿いに立地しているが、中堀を跨ぎ正面玄関に通ずる場所に「百寿橋」なる RC アーチ橋が架設されている（図 1）。特徴的な高欄や親柱をもつが、その歴史的経緯については詳細に記述された史料が発見されておらず、2004 年 4 月現在、土木遺産としての価値も十全には検討されていない状況にあった。



図 1 現在の百寿橋（筆者撮影）

その建設経緯については、竣工当時の写真や建設資金の寄付者が市内在住の百嶋芳松氏であるとの事実以外は詳細が明らかになっていなかったが、2004 年 8 月に筆者らによって「昭和十一年度百寿橋架橋工事一件書類」<sup>1)</sup>（郡山町役場）なる一次史料が発見された（図 2）。この史料は、財団法人郡山城史跡・柳沢文庫保存会として郡山城内の毘沙門郭に 1960 年に設立された地方史誌専門図書館“柳沢文庫”書庫に存在していた。後述のように建設費用の詳細や工事設計書、設計図面、監督日割り表、工事報告書図、工事奉告祭と渡り初め式の式辞・祝辞などが明記されており、百寿橋の建設経緯を知る上で貴重な一次史料と位置づけることができる。本稿では本史料の記述内容の紹介のほか、地元古老に対するヒアリング結果などをもとに、百寿橋の歴史的経緯の一端を明確化することを目的とする。

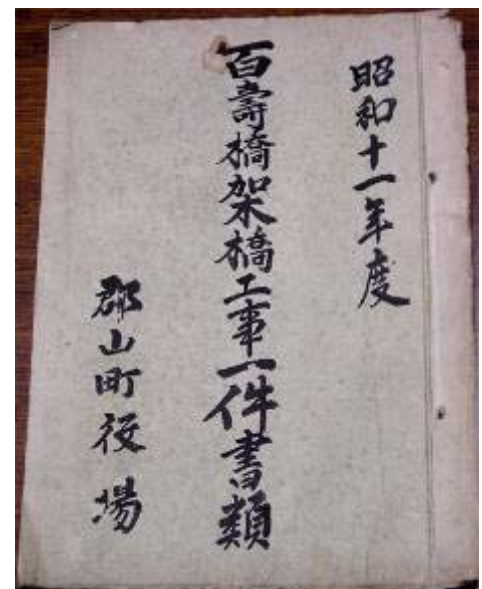


図 2 百寿橋架設工事一件書類

## 2. 百寿橋の概要

現市役所正門前には大和郡山城の旧中堀が矩形の池として現在も残っているが、初代の百寿橋（木橋）は1897年に生駒郡役所開設とともに架けられた。1936年に地元の百嶋芳松氏の寄付により幅員4m・橋長20.4mのRCアーチ橋に架け替えられ現在に至っている。当初は図 3 のように対称形のファサードをもつ市役所庁舎正面の対称軸が百寿橋の橋軸方向と一致していたが、現在は市役所庁舎の



(2) 設計図面 (図 7)

平面図，側面図，3主桁T桁RC橋であることを示す横断面図，基礎杭配列図のほか，親柱添柱図，親柱詳細図などが記載されている。現在のWLは上部工桁下まで達しているが，上部工が明快な変断面をもっていることがわかる。高欄や親柱に施されたレリーフは現存のものとはほぼ同一であるが，親柱頂部に城を模したオブジェが施されていたこと(図 6)，さらに橋脚上の高欄の意匠が当初設計においては現在のようなスリットの施された表現派風のものと異なっていたことなどがわかる。

上部工・下部工が同一図面上に描かれているほか，配筋図も含まれている。

(3) 工事報告書及び渡り初め式の式辞・祝辞 (図 8, 9, 10)

当時の郡山町助役勲七等・谷田平治郎氏による工事報告書のほか，昭和11年12月9日に行われた渡り初め式における郡山町長の式辞，ならびに郡山町会議員・吉川美一氏，郡山高等小学校(校長?)岡村松次郎氏による祝辞が掲載されている。

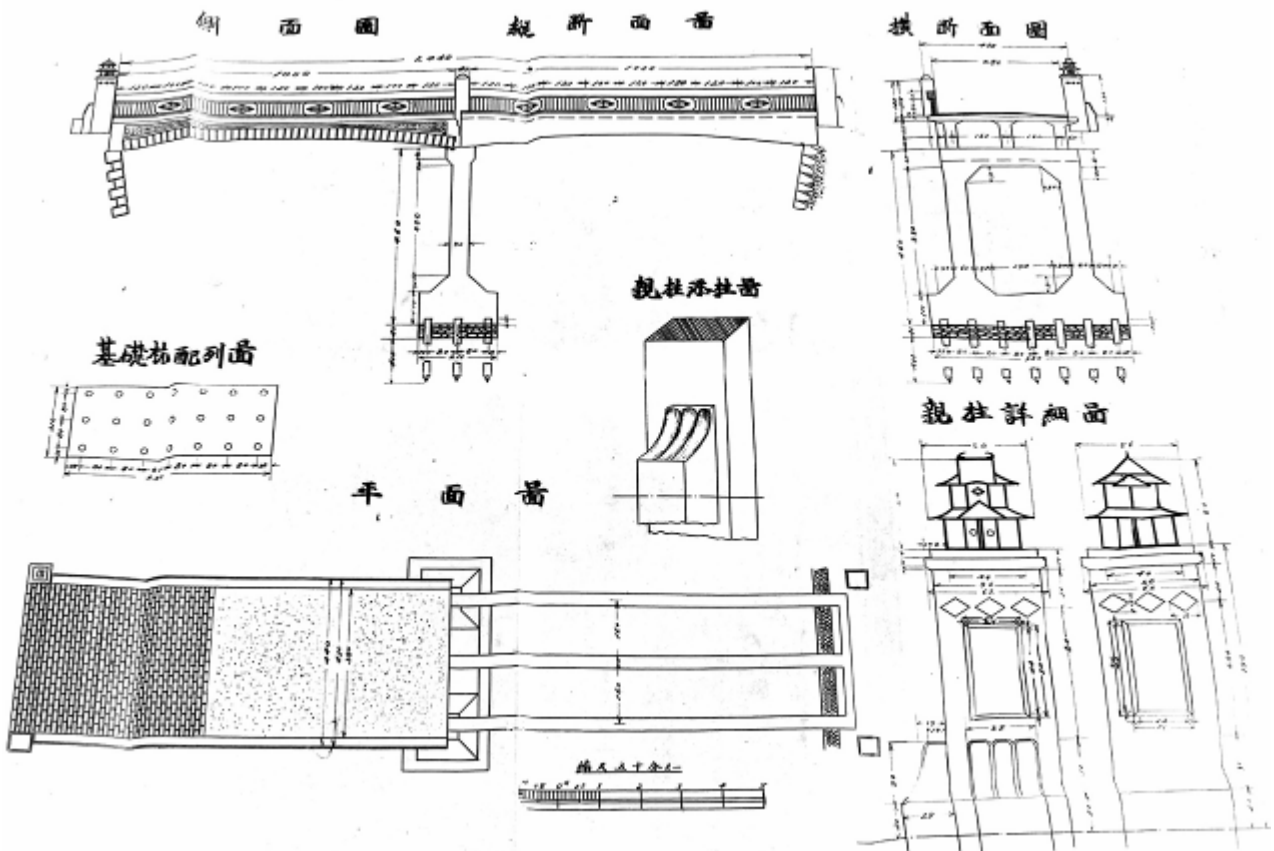


図 7 設計図面



図 8 工事報告書



図 9 式辞

工事報告書には、「美観の点を相当に考慮」したことが述べられているほか、式辞においても「堅牢を主眼とし池沼内に潔く入りたる橋脚両端の橋基・橋桁等には特に苦心」が払われたこと、ならびに「美観の点を相当考慮」したことが述べられている。祝辞においても「役場庁舎前に架設せるため、極めて重要な橋梁である」点、及び旧橋に比較して「堅牢・外観の美」を具備していること、「兩岸に一段の美を加えて町役場が堂々たる美観を示した」こと、設計及び架設監督に「町當局」が携わった事実などが述べられている。また、いずれにおいても百嶋芳松氏の寄付が「美拳」として称えられているほか、同氏が数千金を投じ二宮金次郎の銅像を郡山高等小学校に寄贈した事実も語られている。百嶋氏に関わる情報が著しく不足している現在においては、同氏による地域貢献の実態の一部を示す貴重な情報であるといえよう。



図 10 祝辞

#### 4. ヒアリングによる百寿橋の系譜

2004年現在において竣工後70年弱を迎える百寿橋であるが、史料が限定されている状況下において、竣工当時の様子を理解する上で地元古老の記憶を編集・整理することは有用であると言える。本稿では地元古老1名に対するヒアリングを実施し、設計段階において美観配慮に至った経緯を推察した。

ヒアリングによると、戦前は桜の季節になると市役所周辺は天幕小屋、幽霊屋敷、露天商などで賑わい、現市役所前には薬屋が出店し、大阪からも多くの桜見客が訪れていた。市役所から1.7km西方にある富雄川には幅員の狭い板橋しかなかった当時において、百寿橋はひときわ顕著な存在であったという。当時から郡山城の桜は代表的な観光資源となっており、<sup>2)</sup> 近鉄大和郡山駅から郡山城への動線近傍に位置する百寿橋は町役場関係者のみならず観光客にとってもひときわ目につく構造物であったと考えられる。このほか、戦前における権威象徴としての政府関係庁舎の位置づけなども推察されるが、これらの理由より百寿橋に美観が強く求められていたものと考えられる。なお、今回の調査ではヒアリング情報が未だ不足しており、追加調査によるさらなる情報収集・整理が必要である。

#### 5. 結語

本稿では、現在まで近代化遺産としての十全たる検討が行われていなかった百寿橋について、発掘した一次史料とともに当初設計の実態、ならびに史料内のテキストより当時の美観と橋の重要性の認識を把握した。さらに地元古老に対するヒアリングをもとに、鉄道駅から観光地へのアクセスルート上という百寿橋の立地特性を把握し、美観配慮の背景として推察・提示した。

現在、大阪府・兵庫県・和歌山県など近隣府県において近代化遺産調査が実施段階にあり、近い将来に奈良県においても本格的な調査研究が開始される可能性がある。元来歴史に対する意識の高い奈良県においては奈良文化財研究所や前述の柳沢文庫など、史料保存施設も極めて充実した状態にある。これらの施設を有効に活用し徹底した史料探索を行うことによって、近代以降も含めた都市構想・インフラ整備の歴史解明が実現されていくべきである。また、必ずしも史料にテキストとして残存していない「古老の記憶」を収集・編集することも、地域生活史的観点において有効な手法であるが、この手法の有用性は時の経過と共に大幅に低下する。体系的なヒアリング調査が急務と言えよう。

#### 【参考文献】

- 1) 郡山町役場 (1936) 昭和十一年度百寿橋架橋工事一件書類：本稿で発掘した一次史料である。
- 2) 大和郡山市 (1966) 大和郡山市史